

ヨーロッパから見た日本（92・7・16）

品川 正治（昭20・文甲）

入学は昭和十七年でございます。丁度皆様と入れ違いになった学年でございます。三高を卒業する前に兵隊に取られまして、二〇年三月戦地に行っている間に卒業したということになります。あとは、今ご紹介に頂きました通りの経歴を踏みました。現在同友会の方の仕事が主でございます。去年会社の経営からはすばつと引いてしまいました。ヨーロッパ、特にイギリスの田舎で暮す事を目的として、七月以降今年の二月位まで行っておりました。もともと早くリタイヤしてイギリスで暮してみようと思つて居りました。社長を辞めます時、会長は一期しかやらない、其の後は取締役もご免こうむるという型で退いた訳でございます。

イギリスに行きたいと思つておりましたのは、幾つかの理由がございますが、私は保険会社の経営をいたしておりましたので何といつても損害保険の発祥の地というイギリスに關しましては情報も我々にはよく入りましたし、社長時代、或はそれ以前もたびたびイギリスには行つてお

りましたが、本当のイギリスの生活に入り込むにはお仕着せの出張では全々わかりませんから、あそこで市民として一度暮してみたいと思つて居りました。特にパックス・ブリタニカを実現した国民が其の後、市民としてどんな生活のエンジョイの仕方をしてゐるかを知らなかった訳でございます。しかし本当の動機は、私達が日本人として平安時代の「もののあわれ」と、鎌倉時代の、「名こそ惜しけれ」というそれと明治以降のヨーロッパに対する憧がれと言いますか、コンプレックスつて言うか、この三つは現代の日本人として、私自身も中学・高校以来私の精神的な中枢に持ちつゞけて居りました。

ところが経済界で仕事をいたします場合に、はたしてヨーロッパ・コンプレックスを持つたまままで日本のこれからの在り方を考えていいのか、そういう物に対してどういふ風に考えたらいいかを、実際にヨーロッパで生活して確認しておきたいという気持がございました。それともう一つは一九九二年はE.Cの統合の年でございますので歴史上めつたにないチャンスを現場で体感してみたい気持もございました。まあこういう気持で行つた訳でございますが、一番目にあげましたイギリスの生活をエンジョイしようという目的に関しましては、充分それを味わつて来れたと思つております。

そういう理由で行きましたので、一切現地の会社、当社の社員の手をわずらわさないで、ロンドンから一時間20〜30分離れた田舎、本当の田舎で暮しております。また公共の交通機関以外

は使わないという主義で、地下鉄、バス或は汽車だとかそういう物だけを利用して生活してみました。住まいも最初は買い上げようという気持ちも有りましたが、丁度いまイギリスの大使をしています北村大使が三高の後輩で、私達から見ても後輩ですが、皆さんから見ればずっと後輩なんです、彼の勧めでは日本人が来てすぐに不動産を買々と、そういう人と同じ様に見られるぞ、むしろ英国では外国人が長期に借りて、一年でも二年でも借りてそれで楽な生活が出来るシSTEMがあるのだからそれを使った方がいいだろうと教えられ、それと世話してもらったレジデンスには丁度日本人の東京で開業しておられたお医者さんがロンドンでも開業して、其の後リタイヤしてそこに住んでおられるというので、まあやっぱりすぐ側に日本人のお医者さんがおられるにこしたことがないという気持ちでそこで暮す事にしました。残念ながら私はテニス等やらないのですが、家内の方はテニスが好きで着いたその時から向うの人達と、言葉はまったく不自由なはずなんです、平気で付きあえる。私はぶらぶらしても仕方がないので、その住まいの全体を所有している大きなマナーハウスなんです、その領主の園丁を志願しガーデンを一寸いじらしてくれと頼みました。ただ高い木へ登ばらされても困るのでほんとの花壇の方の所で朝から土をいじっていました。まあ気楽な格好で行つてますので、お金はもらわないという条件でしたから、好きな時に好きなだけ花をさわったりして来ました。

其のあたりの景色は特にイギリスでもジエントルな景色というか、極めて穏やかでしかもどこ

という名所が無くとも全体が非常に出来上った調和の取れた格好でございます。それからセキユリテイに關しましても、ロンドンの市内なんかと違ってまったくセキユリテイに氣をつかうなんて事は有りませんでしたし、ドアに鍵を掛ける必要はまったくないという生活でした。ただロンドンで仕事している日本人は、ロンドンだけに限りませんが、イギリスの各地に大工場が、スコットランドとからウエルズとかに進出しておりますが、その人達の生活は三食、日本食を食べているのがいま普通なんです。昔は、たとえば私は社長時代には駐在している、現地の社員を招待して慰勞する時には日本食が食べたいだろうと日本料理屋につれて行ったものですが、今はもう彼等は朝食に納豆・みそ汁・塩昆布という格好でやっているのです。日本食につれて行くのはさほど喜ぶ事でもないのです。私自身はそういう生活をさせてまったく向うで田舎の食事をして田舎の生活をして来ました。ただそこでイギリス人の生活で意外な感じを受けましたのが、一ツはものすごく簡単な生活だということです。と、言うのは日本人が複雑な生活をしているという事になる訳です。

向うの家庭では奥さんがイギリス料理以外の料理を旦那に食べさせずなんて事は考えもしないのです。日本では和食の日があったり洋食の日があったり、家庭でも中華なんかも食べているのですが、イギリスの奥さんがフランス料理を作ってみたり、ドイツ料理を作ってみたりする事はまずない。まったく日々同じ様な物を食べていて決してそれで変化が少いからと言って誰れからも文

句の出ることはない。その証拠に私の会社で老人ホームをやっているのですが、その社長が一番困っている事は食堂の経営で困っているのです。ちょっとハイグレイドの老人ホームにしようと思つたらメニューをうんといろいろ作らないと、定食みたいな物ばかり出していたらハイグレイドとは誰れも思つてくれない。所がその為に赤字／＼なんですネ。それでヨーロッパではどうなっているか一度見て来て下さいよと言われて見に行つたんです。

私の居たのはウインチエスターの近くでした。ウインチエスターには極めて優秀な世界的にも折紙付きの老人ホームが有りまして、そこへ行つてその話題をしたら向うは怪訝な顔をして、「食事はイギリスの家庭とまったく同じにしているだけだ」とイギリスの家庭とまったく同じと云うのは極めてシンプルな食生活をやっているといふ事なのです。日本でも日本の家庭と同じ様にやればいいじゃないかと言うのですが、日本の家庭が複雑だといふ事に初めて気がついた訳です。本当の老人ホームを作るには自分の所のやり方が参考になりますよと言われましたが、まず何と言つてもそのホームの方達の世話をしているボランティアの人達が老人を本当の意味で尊敬しているんですね、そういう気持で接触している訳です。老人の方達の全盛時代の呼び名で呼んでる訳です。学校の先生だった場合はプロフェッサーと呼んでいますし、外交官だった場合はミニストリーとかという格好で呼んでおります。そういう人達とお話しをしながら人生を教わろうとか、当時の20世紀の初めの頃のイギリスの教育制度を学ぼうとか、決してお義理で付き合つて

いる感じではなく、尊敬しながらやっている。そういうボランティアの人達ばかりが世話している訳ですから、それはもう本当に居ごちがいだろうと思います。しかも景色もジェントルです。イギリスという国は我々年配者にとっては非常に暮ししやすい国だというのが素直な感想でございました。いろんな批評は出来ませんが、ある種の階級社会でございます。その階級社会の現れ方というのは若い人と年配者の区別がきっちりしているという中に持ち込まれております。高年者に対しての若い人の区別が非常にはっきりとしている。

私が一番驚きましたのは、私が親しくしていたそのマナーの主人、彼はロンドンで会社を営んでおり、息子さんは専務で、私も一緒にロンドンに出かけたことがあります。ホーム迄は親父さんも息子さんも一緒なんです。息子はファーストクラスに乗らないのです。それは節約でも何でもないので。他の人の時は乗るんですが、親父さんと一緒だと言ったら親父はファースト、息子は専務であろうとセコンドクラスに乗る、そしてロンドンに着いたらまた一緒に歩いているんです。こういうことをごく自然にやっているんで、そういう点では日本人の生活の複雑さと、年配者と若い人との区別が日本と比べてジェントルな格好でついている事を感じました。シンブルな生活ですが、一方で伝統的なものは万事残して居ります。アフタヌーンティーは伝統的どの家も自分の家独得のコーヒポットで、独得の手作りのスコーンで、今日は誰々れを呼ぼうとか楽しみにしております。たまたま私が行きました去年は、大使も言って居られましたが、イギリ

スと日本との関係が歴史上一番良かった年なのです。それ迄はイギリスとの関係も、まずジャパンプロブレームといわれる時代を経験し、その次は日本の企業を誘致しようとするジャパンオポチュニティという時代があつて、去年はジャパンフェステバルの年と呼んで、イギリス全土で日本のフェステバルを九月の五日を中心に行なっていました。ロンドンで相撲や歌舞伎をやっていただけではなく、私のおりました人口千五・六百人の小さな町でもそれぞれの家が大切に持っている日本に関係のある物を町の公会堂のような所に展示して皆に見せたり、それからそれを隣りの町とお互に交換してかなり長いことやっておりました。

私が日本人だという事を着いたその日から知っておりましたから、鑑定してくれと来るんですが、其の大部分は中国のものなのです。所が漢字で書いてあれば、今はイギリス人は中国というよりも日本という風に思う訳ですから、これは中国ですよ、日本のものではないですよと言うとがっかりしていました。ざっとまあそういうかたちで英国式ライフをエンジョイ出来ました。アメリカンスタイルとヨーロッパアンスタイル或はイングランドスタイルを考えるのならば、やっぱりイングランドスタイルのウェイ・オブ・ライフはいいものだなあと感じました。ただ何故イングランドの生活がこんな風にエンジョイアブルなのかと言うことを考えてみますと、一ツは日本にはなくて向うにしかないものとして、「客の側のソフト」これはちよつと説明が要りますが、先程ご紹介されました様に、私はヒルトンホテルを最初からパートナーとしてタッチしています

が、日本のホテルの水準は世界的に見れば少くともハードの上では極めて高いのです。それから客に対するサービスも決して悪くはないです。しかし何が決定的な欠点かと申しますとお客さんの側のマナーとソフトがないことなのです。これはホテルとしても如何ともしがたいのですが、もしミツシエランが日本のホテルの格付けをすれば、ハードとサービスに関してはみなフアイブスターだと思います。しかしミツシエランの観点から言えば星がつかないと思います。結婚式だと言ってワーツとホールにいっぱい人が集っていたり、そのへんはまあいいとして、子供に対する親のマナーが悪いと思います。子供を入れないホテルも向うはありますが、最近ほたいてい入れます。しかし子供はジュエントルマンの様に自分できちつとメニューを選び、そして親が口を開けさして食物を食べさすという事はいつさい考えもしない。こういう客の側のソフトが日本で欠けているのではないか。それがお客さんである我々がホテルの雰囲気やエンジョイするためには一ツの障害になつてゐるのではないかと思ひます。これはレジヤールを考えます場合、一番基本的な問題でありまして、多勢の人たちが来る所はリゾートじゃない、みなが一斉に押し掛けて来る所はリゾートじゃないと向うの人たちはそういう感覚ですし、もしかりに沢山来た場合にもその沢山来た人達は、他の人達のエンジョイを助ける事はあつても防害してはいけないう感覚を身につけています。

オートキャンプ場では沢山の人が集まっていますが、日本のオートキャンプ場とはまったく違

って、いかに音を大きく出したりしないか、隣りの人にすぐそばでキャンプをしていることを感じさせない様にするかと、お互にそれに気を使っています。この客のソフトの違いを感じました。二ツ目には向うの人達は間合いの取り方、人と人との関係のバランスの取り方が確かにうまいなあと感じました。私も向うで生活をするに当って早くとけ込みたいとか、情緒的な意味で一体性になりたいとかいう事は考えてはまずいということは最初から覚悟して行きました。日本人同志のときとつき合い方が違うことは覚悟していました。やはりある程度のきちっとした距離は置かなくてはいけないだろうと考えながら行つたのですが、予想以上にあの人達の個人生活の在り方、間合いの取り方が上手なのに感心しました。その一ツの例としまして去年のマスターヒト条約をECの統合のローマ条約以降の総括として調印した訳ですが、マスターヒト条約調印の直前にガーディアンというかなりグレードの高い新聞ですが、その一面にメジャー首相の写真を大きく載せて、たった一行だけ「メジャーもイギリス首相の顔になった」と書いてあるのに驚きました。これはうまいなあーと僕は思いました。それ迄国論が二分する位賛否がわれてましたが、いざマスターヒト条約をメジャーがイギリスを代表して調印に行くという前日はメジャーの写真を出し、「メジャーはイギリス宰相の顔になっている」と、一行で言つてあと余分なことは何も言はない。そう言う芸当にはホト／＼感心しましたが、さらに次の日、私が住んでいる地方のローカル紙が、全く同じ写真を載せて、その下に一行「ガーディアンが言ってしまったが俺も言いたかつ

た。」と書いてある。これにはたゞもう参ったというしかありません。そういう意味の向うのフランスの取り方のうまさはちよつと日本では考えられないうまさだと思いました。それ迄の喧嘩なみの論議があつた事が全部活きるのです。プラスに生きてるんです。その晩私は村の PAP で村の人たちと会いましたが、みなその新聞を持っているのです。それだけで今迄わあわあ言っていた連中も、イギリスの宰相の顔になつたメジャーにさあ任せようという感じ、非常に上手いハーモニーの取り方と思ひました。決して今迄の対立意見は押えてませんし、お互にものごく対立しています。後で申し上げますが、EC 加盟に関してはイギリスは非常に（ヘジテイト）しており、国民の意見はさらにそれに対して問題を抱えておりますが、その総括の仕方としては一番うまいのじゃないかと思ひます。先程言ひました客の側のソフトと、バランスとか、間合いの取り方の上手さとか同時にもう一ツ感じましたのは、イギリスの人達のタククスペイヤールとしての意識はこれは非常に強いなあと思ひました。

我々日本人もイギリス人と同じ様に国に対して税金を払っておりますし、税負担は日本の方がむしろ高いのですが、イギリス人は政治との関係においては「俺はタククスペイヤールだ」という意識を強く持っています。そこから国に対して或は政治に対して聞くべき事は必ず聞くという姿勢を持っています。例を申し上げますと、ロシアの支援問題で集會が持たれた時のことです。日本と同じ様に、中央の政治家が、私のおつた村は保守党の牙城なのですが、保守党の中央で役職

のある人が来て説明会がありました。私は二度ばかり聞きに行きました。二度とも必ず出る質問はロシヤのミサイルはどっちを向いているのかと聞きます。ロシヤ支援するという論議をする以上は、ロシヤのICBMは今どこを向いているのかは重要です。だから必ず聞くのです。すると政治家は分からないと答えます。そして分からないという事を前提に論議をしよう、してほしいという格好で論議をすすめます。論議の仕方において事実をまずはっきり確認する。そしてその事実を前提にして意見を交換する。そういう風なのが英国人の論議の進め方なのです。パプで論議しているのを聞いておりませんが、何が事実かとはっきりさせて、その上で意見をいう。そういうやり方です。私は同友会で仕事をしておりますが、日本の論議の仕方は、事実を言っているのか、意見を言っているか意見の中で事実が出て来たり話が後先になります。これは会社の役員会なんかでも同じです。イギリスで一般の人の場合でも論議の仕方としては、まずファクトファインディングをきっちりやって、分からないことについては分からないという前提に立って論議をしようというのが一般です。ところが日本で私はロシヤのICBM・今回二三〇〇発に削減するとか言ってますけどあれはどこを狙っているのかを聞いた人、そういう質問を政治家に向ってはっきり聞いた人を知りませんし、或は国会の論議でそんな論議は一切ない訳です。何故なのか、水をさす様な発言はやらない方が良いという気持でそういう事を聞かないのか、何故なのか、今でも私ははっきりしません。それを聞くのは当たり前ではないかという気持もないようです。聞かな

くとも、お互になあなあで分つているのでしようか。しかしこれはなあなあで分る問題じゃないはずです。二三〇〇発全部が北京を向いている訳ではないということは誰れでも思っているのではないのでしょうか。そのことは、日本の社会でははっきりすべきことをお互に分つてる様なお互に格好のままに政治も経済も運営され、正に日本独得ではないかと思ひます。政治家はそういう質問には必ず答えなければいけないと言ふ考へが、タックスペイアーを自覚している市民と相応じているのです。ソ連のミサイルが一九九一年の秋にはどこを向いておつたかという事実はこれは歴史であつて、いずれは明らかになります。其の時ロンドンに向いてた、東京に向いてたとわかつた時に、政治家と市民との関係は、恐らくイギリスと日本では随分ちがつた状況になるのではないのでしょうか。この違ひは国民性の違いだけではすまされない何かがあるのではなからうかという感じが致しました。その意味でデイベートと言ひますか、論議の仕方もう少し我々は考へなければいけないあとという事と同時に、やはり聞くべきこと、訊すべきことは正した上で事実立って論議するといふ習慣をつけないといつまでも堂々めぐりをくり返すだけではないかとこんな感じを受けました。

ところで、はじめに申しましたコンプレックスの問題に關してどういふ風に私自身結論づけたかと申しますと、これはやはり今でも宿題として残りました。でわイギリス人が日本人をどう見ているかと申しますと、例えば日本人は模倣は上手だが創造力がない、物をクリエイイトする力が

ないと思はれているかと思ひますと、イギリスの人達は日本に対してそういう事を全然考へて居りません。これは今迄わずか百年の間にアングロサクソンが作った文化全部を、言わば模倣して手に入れたのですが、アングロサクソンの支配している世界で勝負する以上、向うのやり方を勉強せざるを得なかつたのです。その意味ではパーフェクトに優等生として勉強して、その上でこれからクリエートする時代に入れのだ。クリエートするのはこれからなんだという風に思っているのです。クリエートする土台はもう作つてしまつた。これから日本がクリエートする時期に入るのだらうというこゝう感じで居ると思ひます。

また日本の資本主義は非常に特異だとか、或は競争の原理が違ふとかいう事に関しては、これもアメリカのリビジヨニストみたいな意見は余りないんです。日本の社会が企業社会になつて、市民社会と企業社会の間にもすごく大きな乖離が出来て行つたということについても、そしてこのことは我々自身最も大きな問題であり、これからの日本の在り方としてそれをどうするかという風に考へている問題ですが、その点に関するイギリス人の答へは「当り前じゃないか。」と言ふのです。経済があんな早いスピードで進んだ場合、社会がそのテンポに追い付けるなんていう事はイギリスの場合でも、もしそういう事になればそれは追い付かない。経済の発展と社会の発展のスピードの違いの為に起つた問題はこれから解決される問題で、だからその差が現在大きく開いている事に関して日本の資本主義が異質だからそうなんだという事はこれは言えない。

ただ日本の経済がなんであんなにスピードが早かったのかという事に関しては国際的ないろんな好条件にも恵まれたろうし、日本の持っているいろんな長所、それから又外国から見たらアンフエヤーと思う様な政官財の癒着関係だとか、こういうものが日本の経済のスピードをめちゃくちゃに早めて行った事は事実だろうけれども、企業社会と市民社会の乖離という事に関して言うならそれは起るべきして起ったので、これはどんな国でも起りうるもので、これから市民社会が追い付いて来る問題という風に考えてよいのではないか。ただ最近の様に市民社会の遅れを悪用してますます経済を發展させようなどと考えればこれは間違った方向に行く。企業社会に比べて市民社会の發達が遅れている事に関して経済人も責任を感じてやっけて行くならばそれで十分ではないかという見方でした。其の点ではアメリカで話しているのと大分違った感じで、それだけ大人の国だなあと思いました。ただまだまだ我々がヨーロッパの人達とお互に等身大で接し、理解出来るかと言えば、これは相当難かしいというのが私が受けた結論です。ドイツ人、フランス人ならば、イギリス人とはいくらでも喧嘩出来るんですが、喧嘩出来るということは、すぐ簡単に修復も出来る訳です。日本人の私はイギリスの人となかなか喧嘩は出来ません。一たん喧嘩をすればなかなか元に戻すのが大変だなあと考えますとなかなか喧嘩も出来ないなあと思います。しかしそこで妙な妥協をしてしまうと何時までもその問題は残ってしまうというのが難しい問題だと思います。向うも我々を等身大では見ていないのです。顕微鏡で見ている部分と望遠鏡で見ている

部分と倍率がたえずゆらいでおります。イギリスとドイツとフランスの関係は倍率は動かさずお互に見ている。これは日本側だけの問題ではなくイギリスの側も日本を見る見方としてはたえず倍率はゆらいでおります。まだアメリカと日本との関係の方が倍率のゆらぎ方が少ないのやないかと思ひます。しかし少くともイギリスは大人の国だという印象は強く感じました。

E・Cの問題に入ります。時間も余りないので結論的に申し上げますが、日本では余り論議されない問題として私には非常に強く感じましたのは、とにかくあいう個性的なイギリスとかフランスとかドイツとかイタリーとかの国が、一つのヨーロッパを目指そうという運動をあそこ迄続けて来た事に関しては、やはり「歴史を動かす力のある理念」が根底にあるという事は認めざるを得ないと思ひます。いろいろ技術的な問題のために紆余曲折がある事にとられるよりも、歴史を動かさして行く力としての理念が一つのヨーロッパを作るといふ、あれほどの難かしい運動を一貫して支えて来たのだという事を考えますとある種の敬意を持って見ざるをえないと思ひます。

かりそめにも日本が韓国、フィリッピン、台湾、中国等周りの国々に対し、一緒になろうと言ひ出し得るかと考えますと、これは到底至難の業です。それと比較するだけでも普仏戦争を戦い、ナポレオン戦争を争い、第一次大戦、第二次大戦を争った国があのように一つの方向に動き、ある程度の統合の成果を上げていふという事は、もっとその問題の基本の所に立ち帰って我々とし

ては腹に入れておかなければいけないと思います。確かにこれから民族問題も次々に起ると思います。すでにユーゴーにしろチェッコスロバキヤにしろ色々な問題が起っておりませんが、少くともイギリスとドイツとフランスが戦争するだろうという事は恐らく近未来にないと思います。そこまで来たと言うことは大変なことであると思います。そこに行く共通理念は一つのものだとしても、実際のE.Cの統合にしましてはそれぞれ思わくは違いますし、特にさいきは国内政治との関連でE.C統合の意味づけが全く変わって来て居ります。ここ二・三年前迄は、フランスはまさかドイツ統合という問題は考えていませんでした。E.Cの統合に当ってはフランスのリーダーシップは疑いがないという感じを殆んどフランス人は抱いて居りました。ドイツの場合はドイツ統一をしようと思えば、それは先の話でまずヨーロッパを統合して、イギリスの場合は最初は市場の拡大として捉えていました。マーケットとしてアメリカとか日本と比較してイギリス一国とかフランス一国という形では小さすぎる。だから拡大して行く事に関しては望ましい。しかし主権の問題に関してはイギリスが一番シビヤな意見を持っています。さきほど言いましたタックスペイヤーという感覚から言っても、これはタックスその物は国王と国会が血を流して勝ち取ったもの、デイベートの結果出来上ったもので、誰れが決めたのかわからない様なタックスは払えないよという感じはイギリス人に非常に強いのです。しかしマーケットの拡大に関してはイギリスが一番割り切っていましたし、その点から見ると東ヨーロッパが入って来るとか北歐が入って来

る事に関して、この七月からイギリスが議長国ですが、拡大の方向を望むでしょう。しかし集中深化という面ではイギリスは躊躇しています。今後ますますそれぞれの国の政府は、国内政策との関連で今迄の指導理念とは違う指導理念を国民むけに説明して行かざるを得なくなっているのです。

もう一つ別の視点も必要です。ブリトンというイギリスの代表者としてECの副議長をしている人と話した事がありますが、彼こそは本当のチャキチャキのEC官僚のはずなのですが、しかし話してきますと非常にペシミストなのです。イギリス人から見た場合、ドイツ音楽を生んだドイツ人、フランス美術を生んだフランス人、そういう国民に対しては非常に尊敬している。しかしそういうすぐれて民族的な角を取ってしまったわなくては統合出来ないとすれば問題だ。そういう角を取ったフランス人やドイツ人、或はイギリス人はこれから物事をクリエートする力を失うのではないか。むしろ今迄の19世紀以降の民族国家のままでお互のクリエートする力をのばして行った方がいいのじゃなからうか。現代のような、ソ連の崩壊だとかという局面に在って新しい世界秩序を作らねばならぬ場合に、ヨーロッパ各国はヨーロッパの統合の為に一番貴重なエネルギーと時間をさいて了つていいのだろうかと言う疑問を語っていました。そんな事をしているとアメリカとか日本の方がずっと新しい世界の構築に対してクリエートして行く力を出して行くのではなからうかと。こういう疑問をまさにECマン中のECマンが言っている事を聞きましたが、

そのような意見は彼ひとりとは申せません。この問題は余り論議はされていませんが、ヨーロッパ統合をおし進める歴史的理念と同じくらしいの強さもあります。この基本的な二つの理念のバランスがどういふ風になって行くのかこれから注目を要すると思います。

ただECの統合の現場に居合せて体感しようとの私の願いは当てが外れました。突如としてソ連が崩壊してしまったのです。ヨーロッパの人達の最大の関心はソ連に向けられました。社会主義体制の崩壊、冷戦の終焉を受けて彼らがすぐに取りくんだことは世界の新しい秩序をどう作るかという事です。その文脈の中で、社会主義大国の中国を含めたアジアはどうなっていくのかと言うことを、日本人としての私に問いはじめました。「これから面白いのはミスター品川、ヨーロッパではなくてアジアだよ、日本だよ。こんな所でうろろしてしないで早く日本に帰った方がいいのではないか」と口々に言うのです。彼等の言い分では中国を含めた一番これから面白い地域でのリーダーシップは、なんとしても日本が取らざるを得ないのじゃないか、ヨーロッパは日本の考えを聞きたい。アメリカがアジアについてこうだああとと言ってもヨーロッパの方がアジアに関してはアメリカよりもよく知っているのだ。アジアに於ける新しい秩序、これは日本の仕事にならざるを得ないよ。其の時に日本の足もとは、果たして大丈夫かねと言うのです。私もその通りだと考えました。たしかにそれがまあ一番基本的に私達に投げ掛けられている問題だという風に感じました。日本がやらざるを得ない場所はそこのだと、しかし同時に対中国、対ア

アジアという問題は日本が一番やりづらい仕事かもしれません。ヨーロッパから見ていると日本の足もとの弱さが見える。これでいいのかという感じですが、これが一ツ投げ掛けられた問題です。

私は残して来た家族の一人が急に病で倒れましたので帰らざるを得なくなったのですが、その後には先のような話をたえず聞かされたので、本当に歴史に身を置くのなら日本に帰った方がいいのではないかと考えるようになりました。

それで、折角のイングリッシュのライフもまだく名残惜しく、このような生活のエンジョイは二度と出来ないだろうという思いを持ちながら帰って来た次第ですが、その思いと同時に私が感じましたのは遅かりし由良之助ではありませんが、遅れて来た資本主義の運命です。日本の資本主義は成功の度合も大きくテンポも早かったが、しかし歴史的には遅れて来ました。遅れて現場に着いた日本である事は間違いないです。日本ではイギリスの人達がエンジョイした様な、本当の豊かさを実感させる市民生活を、さあこれから実現して行こうと政府も国民も漸く本気で考えるようになりました。どうやらおそかったようです。もうすでに環境問題だとか資源問題だとかが非常に大きなプレッシャーとして解決しなくてはいけない課題として出て来ております。生活大国という政府の五ヶ年計画のスローガンにある種のうしろめたさを持たざるを得ないというのは、もう本当の意味で豊かな市民生活をエンジョイすることに経済政策の重点を置くには日本の資本主義はいさ、か遅れすぎた。ヨーロッパと同じ事を夢見ても難づかしいのではないかと

考えざるを得ません。すでに新しい次の課題にも取り組まざるを得ないという時期に入ってしまったのではないかと思えます。その意味でもせめて半年間でもあのような生活が出来た事をむしろ感謝しながら帰って来た次第でございますが、一寸時間を超過して申し訳ありません。

まったく印象記的なお話で終始してしまいましたことをお詫びいたします。この様な私にとつて大先輩に当る皆さまの集まりに呼んで頂きまして、又、オフレコでございますから何でも気楽にお話しさせて頂き感謝しております。どうも有り難うございました。

（経済同友会副代表幹事・専務理事）
元日本火災海上保険社長・会長